M E S S A G E

Tourism 観

I have recently sat on two committees to do with ecotourism, one with the Ministry of Environment, the other with the City of Tokyo. The Ministry of Environment has drawn up a long manifesto, but the City of Tokyo has taken some of my advice and acted upon it, creating six new rangers who can help guide visitors.

Japan has the ideal infrastructure for tourism. Japan is generally very safe, even though this is unfortunately changing, as we can see with the increased presence of police at airports and Shinkansen stations. We have freedom of movement and an excellent and very reliable transport system, including fast and regular trains, good (but expensive) highways, ships, ferries and a superb airline system. We also have a wonderful service (takuhaibin) that enables us to travel without heavy baggage. We have a great range in climate and habitat, from Hokkido to Iriomote and the most southerly islands of Greater Tokyo, as well as one of the longest and most intricate coastlines in the world. We have a unique range of accommodations, from traditional ryokan and luxury resorts, to cheaper but excellent business hotels, minshuku and pensions. Japan is an island nation, which means it has better control over who enters, and leaves the country than a nation liked to other by land.

Few nations have better potential, but as I have said and written countless times, we also have one of the poorest organizations for national park rangers in the world, both in training and in numbers. This is greatly diminishing our potential for the tourist who wants to go one step further and experience Japan's unique nature. Private guides and companies are helping, but there is nobody to guide and oversee the private guides, some of whom are excellent, but there are some who shouldn't be taking an old lady across a street on a green light. The government wants to increase tourism but continues to ignore this lack of park rangers, so I guess that in the end, it is the individual efforts of those in the industry to look after guests, give them not only what they expect, but some nice chances and surprises, and to increase the value and reach of travel and hospitality to both the host and the guest. Here in Kurohime I get more guests who want to see our little woods than I got when I was the Warden of a National Park in Ethiopia.

> C. W. Nicol Kurohime, Nagano July 12th., 2004

C. W. ニコル

■略歴

1940年7月17日生。英国ウェールズ生まれ。17歳でカナダへ渡り、その 後、カナダ水産調査局北極生物研究所の技官として、海洋哺乳類の調査 研究にあたる。

1967年~

2年間、エチオピア帝国政府野生動物保護省の猟区主任管理官に就任。シ ミエン山岳国立公園を創設し公園長を務める。

カナダ水産調査局淡水研究所の主任技官、また環境保護局の環境問題緊 急対策官として、石油、化学薬品の流出事故などの処理にあたる。

1980年:長野県黒姫に居を定め、以降、執筆活動をしている。

1995年7月:日本国籍を取得。

2001年:自ら荒れた森を購入し、生態系の復活を試みる作業を16年間行

いNPO「アファンの森 基金」を設立した。

2002年: 財団法人 C. W. ニコル・アファンの森財団を設立

1993年~国際松濤館空手道連盟顧問

1993年~(財)屋久島環境文化財団特別顧問

1994年: 内閣官房 [21世紀地球環境懇談会] 委員 1995年~学校法人東京環境工科学園理事・実習場長

1997年: 内閣官房「子どもの未来と世界について考える懇談会」委員

2002年: 内閣府「未来生活懇談会」委員 2003年~東京都 エコツーリズム・サポ ート会議委員

2003年~環境省 エコツーリズム推進会 議委員

著書、等

『ティキシー』角川書店 『勇 魚』文藝春秋社 『風を見た少年』講談社 『TREE』徳間書店 『FOREST』徳間書店 『北極カラスの物語』講談社 『魔女の森』講談社

『盟 約』文藝春秋

『遭敵海域』文藝春秋

『裸のダルシン』小学館=2002年児童福祉文化財の推薦を受ける。

※2000年原作「風を見た少年」がアニメ映画化され第45回アジア太平洋 映画際でグランプリ(アニメーション部門)を受賞。

最近、私はエコ・ツーリズム(生態環境観光)について の二つの委員会に出席しました。一つは環境省の主催 によるもので、もう一つは東京都のものです。環境省で はエコ・ツーリズムの定義が長々と提示されたのに対 し、東京都では私の提案を取り入れた動きが見られま した。観光客ガイドをサポートするレンジャーを6人、新 たに設置するというものです。

日本には観光産業にとって理想的な基盤があります。 空港や新幹線駅にみられる警官数の増加といった、好 ましくない変化があるものの、一般的には治安は良好で す。また、移動の自由もあります。時間に正確な高速鉄 道網、立派な(しかし高価な) 高速道路、旅客線やフェ リー航路、そして快適な航空サービス。これら信頼でき る優れた交通機関の他にも、宅配便というすばらしい サービスがあるので、重いスーツケースを持つことなく 旅行ができます。北は北海道から南は西表島や東京都 の南端の島々に至るまで様々な気候と習慣。世界に類 を見ない長さの複雑な海岸線も見られます。また、伝 統的な旅館やすばらしい保養地施設だけではなく、廉 価なビジネスホテルや民宿、ペンションもあり、宿泊施設 も多様です。そして日本は島国なので、陸続きの国に比 べて出入国が容易に管理できます。

観光に関していえば日本以上にポテンシャルのある国 はそうないでしょう。しかし、私がこれまで常々口にしてき たように、国立公園の公園管理人の育成や人数というこ とに関しては、日本は世界で最もお粗末な組織しか持た ないといわざるを得ないのです。これは観光客が日本固 有の自然をさらに深く体験しようとする可能性を著しく阻 害するものです。民間のガイドや旅行会社は、手助けはし てくれますが、彼らを指導し、監督する人はいません。優 れたガイドや旅行会社が多く存在する一方、青信号で老 人の手も引かずに横断するような人もいるのが現状です。 大事なのは、観光客に気を配り、彼らの期待を満たすだ けではなく、より一層の機会や感銘を与えること。そして 観光客のみならず、観光産業に携わる人たちをも含めた 両方の人々に旅行の価値を高めるようなもてなしをするこ とです。こういったことは、現在の状況では観光産業に従 事する人々個人の努力にかかっているのだと思います。

ここ黒姫地区では、かつて私がエチオピアの一国立 公園の管理人をしていたときよりも多くの人が、小さな 森を見に来ているのですから。

> C. W. Nicol 長野県上水内郡信濃町黒姫 2004年7月12日

